平野総長がリサーチャーズビレッジ大幸を視察

12月１日(月)、10月末に改修工事を終えたリサーチャーズビレッジ大幸を、平野総長が視察しました。

この建物は、昭和54年に附属病院分院の看護師宿舎として建設されたもので、平成８年に附属病院分院が鶴舞本院に統合されてからは宿舎としての役目を終え、その後は倉庫として利用されてきました。本学ではここ数年来、毎年1,000名前後の外国人研究者を受け入れており、数か月以上滞在する外国人研究者用の居住施設の整備が急がれていました。このような状況を踏まえ、今年度、外国人研究者の居住施設として同宿舎を再生させる改修工事を行ったものです。

視察の様子

同施設は、本学において比較的長期間（１年程度）教育又は研究に従事する単身の外国人研究者が居住することを想定しており、改修前は、各個室は６畳一間、共同便所、共同風呂でしたが、今回の改修によって個室２室を１室とし、各室内にバス・トイレ及びキッチンを備えました。居室は全部で14室あり、そのうち１室はバリアフリー仕様となっています。各室には３か所給湯、エアコンが装備され、冷蔵庫、電子レンジ、液晶テレビなどの家具が備えられているほか、インターネットへの接続や、セキュリティー対策も考慮され居住環境の充実が図られています。

また、省エネルギー対策として、外部サッシの複層ガラス化のほか、外壁には外断熱を採用しています。

この施設は本年１月の利用開始を予定しており、既存の外国人研究者用居住施設とともに、本学の国際交流の更なる進展に向けてその利活用が大いに期待されます。

第44回、第45回防災アカデミーを開催

11月17日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第44回防災アカデミーが開催され、「TSUNAMI 文化を世界へ!」と題して首藤伸夫日本大学教授が講演を行いました。

日本の津波研究・津波防災は世界をリードしており、本学でも2004年12月26日のスマトラ沖地震津波に対して、津波発生の１ヶ月後から定期的に調査団を派遣し、知見や教訓の収集・発信に取り組んでいます。今回は、津波研究の世界的権威である首藤教授から、「TSUNAMI」に関する知見や教訓をどのように世界に発信することで防災に役立てられるのかについて、豊富な事例をもとに解説がなされました。特に「大地震・津波災害は東海地方でも他人事ではなく、長期にわたって教訓を引き継いでいくことが大切である」という提言に参加者一同は深くうなずいていました。

12月11日(木)には、第45回防災アカデミーが開催され、羽賀友信長岡市国際交流センター長による「外国人とどうつきあうか？　災害時の異文化コミュニケーション」と題した講演が行われました。

被災地では、外国人は災害時要援護者としてさまざまな不便を強いられます。羽賀センター長は、2004年新潟県中越地震、2007年新潟県中越沖地震において外国人が十分な支援を受けられない事態に現場対応を行ってきました。アカデミーでは、「災害時の異文化コミュニケーションのあり方」について、言葉・文化の問題に私たちがどう取り組むべきかについて紹介されました。

講演する首藤教授

講演する羽賀センター長

第44回防災アカデミー会場の様子